

聖書：ローマ 12：17～21

説教題：善をもって悪に打ち勝つ

日時：2016年6月5日（朝拝）

ローマ書 1～11 章で素晴らしいキリスト教の教理について見て来た私たちは、この 12 章から、その神への感謝をどのように具体的な生活の中で現わすべきかについて、パウロのメッセージを読んでいます。今日の箇所では扱われているのは、私たちが誰かから悪をされた場合のことです。クリスチャンになれば、いつも神によって守られて、悪いことが何も起こらないようになるわけではありません。14 節で見たように、むしろクリスチャンであるということで、人々から迫害されるということが起こって来ます。あるいはこの世はまだ天国ではありませんので、様々な悪がのさばっています。そういう世にある者として様々な悪のとばっちりを受けることもあります。それらの自分になされた悪にどう対処するか。ここで述べられていることは、そういう状況でも神に喜ばれる生活の仕方があるということです。私たちはそこでも神への礼拝生活（12 章 1～2 節）ができるのです。

今日の御言葉を見るにあたって初めに押さえておきたいことは、ここで述べられていることは互いの個人的な関係におけるあり方であるということです。社会の中で起こる悪にふさわしい罰は下さないのがキリスト教なのではありません。悪はやはりきちんとさばかれ、その報いが与えられるべきです。正義は実行されなければなりません。しかしそれは公的な立場に立てられた人によってなされるべきことであると聖書は述べています。そのことが次の 13 章で扱われます。そしてそのこととセットで聖書が述べていることは、私たちは個人的な立場で私的に報復してはならないということです。個人個人が勝手に誰かへの懲罰的行為に走ってはならない。今日の御言葉は、その個人の立場にある者についての命令です。

17 節にまず「悪に悪を報いることをせず」とあります。私たちはそうしやすい者です。やられたらやり返す。目には目を、歯には歯を。された通りに仕返す。いや、傷つけられた分、もっと上乘せしてと。しかし「すべての人が良いと思うことを図りなさい。」とパウロは言います。ここに今日まず注目すべき大事なことが語られています。それはすべての人にどう思われるかを良く考えるということです。この「すべての人が良いと思うこと」という部分は、直訳では「すべての人の前で

良いこと」となります。ともするとクリスチャンは、こう考えやすいかもしれませんが。「私は人がどう考えるかは気にしない。神がどう思われるかだけを心に留める」と。確かにそこに真理はあるのですが、そのあまり、人々がどう考えるかを顧慮しない傍若無人な態度を取るの良いのではありません。パウロはここで「人々がどう見るかを良く考えなさい！」と言っています。どうしてそうなのでしょう。それは人々の前での私の振る舞いは、神の栄光に関わるからです。Ⅱコリント 8 章 21 節：「それは、主の御前ばかりでなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えているからです。」 I テモテ 3 章 7 節：「また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。」 人々はある意味で私たちを良く見えています。ですからそこで人々から良いと見られるような人であることは大事なことです。もちろんだからと言って私たちは人々の考え方に合わせるのではなく、あくまでも基準は神の御言葉なのですが、しかし本当に良いことは人々にも良いと認められるはず。そのことを考えて行動するということです。

より具体的なことが 18 節にこうあります。「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」 原文には「もし可能なら」という言葉が入っています（新共同訳：「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない）。これはすべての人と平和に暮らすことが可能でない場合もあり得ることを示しています。たとえばこちらがそのための働きかけをしても、相手に全くその意思がない場合。関わりを拒絶して来る場合。あるいは相手と平和の関係を持つために信仰において妥協するしかないという場合。私たちはそこまでして人間と平和になるようにとは言われていません。しかしこの 18 節の意図は、できなくても良い言い訳を見つけることではなく、努力してすべての人と平和であるように努めよ！ということ。イエス様も山上の説教で「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」と言われました。平和のない所に平和を造り出すこと。これは主の弟子が取り組むべき課題です。

もし私たちがその関係を結ぶことが難しそうな人と平和の関係が生まれるように努力して歩んだらどうでしょうか。それは人々に大きなインパクトを与えるでしょう。あの人は普通とは違う。あの人は平和を造り出す人だ！と。そう見られるように励まなければならないのです。その反対であってはならないのです。クリスチャンは喧嘩っ早いとか、すぐ論争するとか、よく周りに争いごとが起きているなど

と言われぬように。むしろあの人は何か平和を持っている。それが周りに流れ出ているようだと見られるような生き方をするように、と。17 節の「図りなさい」という言葉は「前もって良く考える」とか「計画する」という意味の言葉です。悪が自分に対してなされた時、自分の行動は人々に見られていることを覚えて、まず良く考える。そして神の御名がたたえられるために、神の平和が外に流れ出て行くようなあり方を考えて行動する。これが神に喜ばれ、神を礼拝する私たちの生き方であるということです。

さてなされた悪に対して私たちがどうすべきかについて一つのことは分かりましたが、ある人は「悪の問題はどうなるのか」と思うかもしれません。悪はそのまま放置されて良いのか。適切な罰が下されなくて良いのかと。それに対して 19 節はこう語ります。「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」先に述べたように、聖書は個人的な立場で私的に報復してはならないと語っています。復讐をするのは神であると言われていいます。私たちはそのことを受け止めつつも、自分が願うタイミングで相手に罰が下らないとイライラします。そしてついには待ち切れなくなって、この悪を見逃すのは神の御心ではないなどと主張して、神が立てている権威に訴えるという方法を取らずに、自分の手で私的に報復行動に出ようとする。しかしこれは私たちが勝手に裁判官の椅子に座って裁判を行なうようなものです。神が「それはわたしがする」と仰っているのに、それを信じず、神の椅子を横取りするような暴挙です。マタイの福音書 7 章 1～5 節に「さばいてはいけません」というイエス様の言葉があります。あれも公的な裁判までを否定するものではなく、あくまで私的な個人的なさばきを禁止するものです。そこで言われているように、私たちは自分の目の中に梁が入っているような者であるにもかかわらず相手の目の中のちりが気になって、それを取りたいと申し出るような者です。そんな私たちにはとても公正な判断などできません。ある人は不敬虔の本質は、私たちが神の位置に取って代わろうとすることだと言いました。私たちはそのような罪を犯さないように自戒しなければなりません。「神に怒りに任せなさい」と言われています。

しかしこの言葉は、私はさばかないが、神が厳しくさばいてくださることを期待し、それを願うという意味ではありません。時々、次の 20 節と合わせてそのよう

に理解する人がいます。20 節で私たちは敵が飢えたなら食べさせ、渴いたら飲ませなさいと言われていました。「そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。」と。ある人はここを、私たちは敵に対して善を行なうことによって、益々厳しい罰がやがての日に相手に下るための準備をするという意味に読みます。善を行なっても悔い改めないであろう敵の上には、将来一層重いさばきが下る。そのことを予測しながら今は耐え忍ぶという風に。しかしこれはローマ書 12 章の文脈に合いません。14 節では「迫害する者を祝福せよ」と言われました。呪いの気持ちと混じってはならないと言われました。ですから 19～20 節も、相手の上にやがてさばきが下ることを楽しみに待ちながら、表面的に良いことをするという意味ではないのです。それでは結局、私たちが裁判官の席になおしがみ着いていることにならないのでしょうか。ですから「神の怒りに任せなさい」というのは、神に一切をお委ねするということです。神が正しいさばきを行なってくださることに信頼して、自分があれこれ言うことはもうやめる。

むしろ私たちが集中すべきは、20 節にある通り、敵が飢えたら彼に食べさせ、渴いたら飲ませるということです。「そうする時にあなたは彼の頭に燃える炭火を積むこととなります。」 これはどういう意味でしょうか。それは相手に体の中が熱くなるような恥の感覚を与えるということでしょう。その人は思ってもみなかったクリスチャンからの善を受けて、まるで燃える炭火を頭に積まれるようなショックを覚える。そして自分のしたことを正しい光の下で振り返り、ついには考え方の大転換、悔い改めへ導かれる。この言葉は箴言 25 章 21～22 節からの引用と考えられますが、もともとの箇所でもそういう意味で使われていると考えられます。私たちはなぜそこまでしなければならないかと思うかもしれませんが。ひどいことをされたのに、相手に善を返し、相手の悔い改めと救いにまで仕えなければならないのかと。しかし良く考えれば、これは神が私たちにしてくださったことでした。ローマ書 5 章 8 節：「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」 神は反抗する私たちのためにご自身の一人子を与えてくださり、私たちに良くしてくださいました。霊的に飢えていた私たちにまことの食物を与え、渴いていた私たちにキリストにあってまことの飲み物をくださいました。私たちはその神の愛に激しく打たれ、まさに燃える炭火を頭に積まれたのです。そして自分の罪を悟り、人生の根本的な転換へと導かれました。その神がしてくださったことに

感謝して、私たちも神にならって歩むようにとされているのです。

最後の21節はまとめです。まず「悪に負けてはいけません」とあります。注目すべきは、敵に負けてはいけませんとあるのではないことです。「悪」に負けてはいけない。つまり私たちがそこで戦っている真の相手は、私に悪を行なった人というよりは「悪」なのです。もし私たちが相手の悪に応じて悪を返したら、相手には勝っても、悪には負けたこととなります。なぜなら相手が犯した悪に加えて私も悪を犯したからです。悪はこの世で2倍になりました。これはサタンの王国拡張のために一層手を貸したことに他なりません。そうではなく、私たちが召されているのは善をもって悪に打ち勝つことです。敵に良くすることです。それによって悪の広がりやにストップをかけることができる。むしろ神の御心にかなうことが地に広がり、神の御国が広がることにつながる。私たちはそのようにサタンの国が広がるのか、あるいは神の国が広がるのか、という戦いのただ中にあるのです。果たして私たちはどちらの国が栄えるために日々身を投じているのでしょうか。

最終的な審判の日が来ていない今日は様々なことが未解決のように見えます。理不尽なことがまかり通っているように見えます。しかし今日の箇所からもう一度心に留めたいことは、神はすべてを見ておられて、かの日には必ず完全に正しいさばきをなされるということ。わたしがさばく、わたしが報いをする、と神は言うておられます。私たちはそのことを信じ、深い慰めと平安を頂いているのでしょうか。このことを信じるなら、私たちは自分の手でやり返すことに躍起にならなくて良いのです。むしろ私たちはそのことから解き放たれた者として、自分はここでどのように歩むことによって神に喜ばれる生活ができるのかということに集中すればいいのです。実に今日の御言葉のチャレンジは、私たちは誰かに悪をされた時の対処においても、神への礼拝生活ができるということ。ひどいことをされた時、そこで神に私の感謝を表す生き方ができる。人々の前で神の御名がたたえられるための生き方ができる。サタンの国が衰退し、神の国がいよいよ進展するために仕えることができる。すべてを見ている神は、そのような私たちの歩みもつづきに見ておられ、やがての日には「良くやった、良いしもべだ」と言ってくださることでしょう。その日を楽しみにして、私たちは神への礼拝生活をささげて行きたいと思いません。自分の小さな名誉や自尊心のために振り回されて一生を無駄に費やしてしまうのではなく、神の栄光とその御国のために自分の生涯をささげ、用いられ、また豊

かに報われる歩みへ進みたいと思います。